

奥嶺

内山和江句集

ふらんす堂

内山和江
奥嶺

ひとところ明るき夜空星まつり

冬山へ発つ子に揃ふ赤きもの

この雨に終るさくらと思ひけり

初蝉やまだ濡れてゐる声なりし

帰省子の家族にはなき匂もつ

Yを脱ぎてより足纏れけり

雛かざる家遠まきに野靄立つ

青むまで姿見拭ひ夏はじめ

水靄に茅の輪作りの葉ずれ聞く

降りぐせの貴船女将の白上布

川床涼み一番客に灯を強め

胸中に描く序の舞初ざくら

所作台に足裏吸はるる新樹の夜

山台に見立てし古墳田鶴舞へり

滝行へきつく穿きたる薄草履

滝行を終へし勢をまだ解かず

能登びとの見えて声なき雪間垣

豪雪予報貼り出してある山の宿

箒目を崩さず消ゆる春の雪

花菖蒲一輪そよぐ風の筋

梅干して山の日ざしの定まらず

素踊の続きのやうな夕涼

舞稽古立夏の背筋正しけり

秋水の光をまとふ祝ぎの舞

土を出しばかりの白妙大根引く

山 国 の 蒼 き 流 れ へ 雛 流 す

戸 隠 の 水 音 空 へ も の の 芽 へ

老 鶯 の 声 さ へ と ぎ れ 修 那 羅 山

姨 捨 に 早 苗 月 くる 奔 り 水

霧 こ め て 野 草 の 色 の 深 ま り し

ウインドの白靴空へ走りさう

先客のコツプの氷つぶやきぬ

ブラインドー気に西日返しけり

青ほほづき完封のままふくらみ来

合掌の屋根の貫禄霧を抽く

括られてなほ風通す残り萩

喚声が瀬音に変わる花火の間

大つらら薙げば切口海鳴す

飛びとびに野の梅育て隠れ耶蘇

露の句碑ぬぐひしのちの手の火照

句碑守のお役賜る葛黄葉

柎挿す鬼無き里に近く住み

山脈を春へ押し出す奥嶺かな

自力もて福藁に乗る車椅子

解きしとき雪吊の縄棒立ちに

白木蓮や鳥にならんと苞を脱ぐ

マラソンへ振る手に苗の移植篋

きはるる西日湯槽に遊びをり

雪畑に立てて青菜のさぐり棒

白魚のあやしき水を掬ひけり

著者略歴

内山和江（うちやま・かずえ）

昭和7年5月 東京に生まれる

平成元年12月 「沖」入会

平成7年 沖同人

第23回沖新人賞受賞

平成8年 第26回沖俳句コンクール1位入選

平成8年 俳人協会会員

句集 奥嶺

発行 二〇〇〇年一〇月二八日

著者 内山和江

発行人 荒山岡喜美子

発行所 ふらんす堂

B6変形 二句組

PDF製作 俳誌のサロン